エッセイ

道（みち）路

そいつは隣町の「国鉄」駅からの客人を連れてきた。角張って真っ黒なそいつは、低いうなり声をたて、村の道を塞ぐようにでんと居座っていた。僕たちは遠巻きにして、「ハイヤー」と呼ばれるそいつを見つめていた。

突然、神の声が聞こえた。

「ちょっとだけ乗せちゃろか？」

「！……」

見上げると運転手のおっちゃんの得意そうな顔があった。

僕たちは歓声を上げることも忘れ、無我夢中でハイヤーに乗った。ハイヤーはけたたましく身体を震わせ、隣町へと疾走する。土埃を巻き上げて突き進む車の中で、僕たちは誇り高い気分に浸りきった。

「あんまり遠くまで行くと、帰りが大変だで……」

運転手のおっちゃんは、隣町へ入ったあたりで僕たちを降車させた。降って湧いた幸運に夢うつつの僕たちは、今体験したばかりの感動に興奮しながら一時間あまりの道程（みちのり）を歩いて帰ってきた。

汽車やバスに乗ることがひとつの事件であり、荷物運搬の主役は牛・馬車が果たしていてトラックそのものも珍しい時代の強烈な思い出である。

そんな時代からわずか半世紀余りを経た現在、人類の移動手段はめざましい発展を遂げ、今や月や火星ですらが、一般人の旅行目的地に掲げられるようになった。自動車についても性能面は当然、その普及状況も一家に2～3台という目覚ましい変貌ぶりで、町にも村にも自動車が溢れかえっている。もはや、自動車は珍しいものではなく、まさに自動車なしでは生活が成り立たないほどの「暮らしの道具」となった。

人類を人類たらしめたのは、道具の発明だと言われているが、便利な道具ほどその使い方を誤ると悲惨な結果を及ぼす。自動車も然りで、「走る凶器」による「交通戦争」の被害者は今なお増え続け、その排気ガスは地球規模での環境破壊の要因と責められている。

かつて憧れの眼差しで見つめられた自動車は、今では「（なければ困るけど）邪魔！」という冷たい視線に曝される。

かくして、騒音も排気ガスも出ない自動車が生み出され、新たな商品価値として環境への配慮と安全がうたい文句となってきた。

道具は人間が豊かに暮らすために創り出したものだからこそ、人間が人間らしい慈しみを持って使いこなさなければならない。人間が道具に振り回されないためには、道具の性能だけに頼るのでなく、自らも地道な努力を必要とすることを忘れないようにしたい。

「空を超えて　ララ星の彼方
　行くぞアトム　ジェットの限り」

「おお　道よ　立つほこり
　寒さに震え　茂るブーリャン」

「鉄腕アトム」そしてロシア民謡「道」の歌い出しである。

ある日、車を運転していて何とはなしにこんな歌を思い出した。

目の前には高速道路のインターチェンジが何層にも重なって空を覆っている。まるで龍が身をくねらせながら天に昇っていくかのようなその風景は、私を一気に飲み込むような威圧感で迫ってきた。

……私の子供の頃の道といえば、晴れの日には砂埃が舞い上がり、雨の日ともなれば道のあちこちに水たまりができていた。あちこちにできた道路のくぼみを補修するためにバラスと呼ばれる砕石がばらまかれ、そんな道路を激しい上下運動をしながらヨイショヨイショと自動車が走り抜けていく。

昔、人々は山や川や谷など自然の障害物をできるだけ避けながら、道を拓いてきた。しかしいまや、自然の障害物は科学という武器で粉砕されるか足下に踏みしだかれ、日本の国土を縦横無尽に道路が貫く。こうして大量に生み出されたその道が、橋が、トンネルがいま、耐用年数の到来で軋み声を上げ、あちらでもこちらでも今にも崩れ落ちる危険が叫ばれている。

「鉄腕アトム」の作者、天才手塚治虫は、科学の進歩を的確に見抜くとともに、その負の部分も見据えている。１９５０年代の彼の作品世界では既に道路は宙を貫き、ロケットが宇宙を飛び交い、ロボットが人間と共生している。私は子供心にも空想の世界と知りながら夢中になって読んでいたものだ。しかし、いまやそれは空想の世界ではなく、現実に道路も鉄道も宙を疾走し、宇宙には残骸と化したロケットが宇宙ゴミとなって漂っている。

確かに世の中すべての分野で便利にはなった。しかし、私たちは人間を含め地球上の動植物の多くの命を犠牲にその便利さと効率化への道を疾走していないだろうか。

一昔前の交通安全標語に「狭い日本　そんなに急いで　どこへ行く」というのがあったが、まさに、このままでは、我が日本国はどこへ行くのだろうと心配になる。

道の先には夢溢れる未来があって、その夢に向かって人と人が互いに手を携え、埃にまみれながらでこぼこ道をゆっくりと歩み、たまには自然の恵みに身を寄せて憩んでいたそんな時代の心を今一度思い返し、大切にしたい……。

「おばあちゃん、危ないで！そんなとこ歩いてたら**車に轢かれる**がな」

「へっ？　今時（いまどき）は**車が人をひく**んかいな…　昔は**人が車をひいた**もんやが…」

こんなおばあちゃんが、のんびりゆったりと歩ける道でありますように。

加々里　研一

改定版安マネ読本

ただいま好評発売中

事故防止等安全対策マニュアル

2010年版

◆わかりやすい運輸安全マネジメント導入の手引

◆運行管理・整備管理業務にも役立つ内容

◆中小規模事業者が取組みやすいチェックシートを盛り込んでいます。

●直近の通達改正等に即した見直しを行いました。

●準大規模事業者・中小規模事業者の運輸安全マネジメント実施に当たって、参考事例をふんだんに取り入れています。

≪別冊付録≫安全管理・運行管理業務等チェックシート

日常業務に役立ててください。

お問合せ先：公益財団法人　関西交通経済研究センター
ＴＥＬ　０６－６５４３－６２９１

販売価格：５００円（税込）

編集後記

地球温暖化が叫ばれていますが、この温暖化とは気候が温かくなるだけの単純な話ではなさそうです。近年、頓（とみ）に季節の巡りが混乱してきているのを実感させられています。夏真っ盛りと思っている間に、なぜかいきなり晩秋。

人間世界の政（まつりごと）が混乱を極めている現在、せめて四季折々の自然の魅力を満喫して心を清めたいと思っていながら、日頃の慌しさにかまけているうちに季節が移ろい、気が付けば、「日本の四季はどこへ行ってしまったのか」と独りごちている我が身です。

こうして、時と季節に追いまわされているうちに、やり残していることの多さに愕然とする、そんな思いが年齢とともに多くなってきている気がします。

今回の秋号も、大黒近畿運輸局長様をはじめ、関係者各位のご協力を賜ってようやく発行にこぎつけたものの、ずいぶんと遅くの完成となってしまいました。

これもひとえに編集者の不手際の結果で、自戒の念を込めて、皆様に心からお詫びを申し上げます。

今後とものご支援をなにとぞよろしくお願いいたします。

公益財団法人関西交通経済研究センター
常務理事　坪　倉　啓　三

本誌は、競艇公益資金による日本財団の助成金の交付を受けて編集発行したものです。

関交研 秋季号　2012年発行

編集発行　公益財団法人　関西交通経済研究センター
編集兼発行人　坪 倉　啓 三
〒550-0005　大阪市西区西本町1丁目7番2号（ウェスト・スクエアビル 9F）
TEL 06（6543）6291
FAX 06（6543）6295
e-mail a.kankou@kankouken.org
URL http://www.kankouken.org